「ねえ、ワタナベ君」と “Hey, Watanabe”の間
――『ノルウェイの森』の英訳から見た「文化」の翻訳[1]

簗田憲之

はじめに

昨年，村上春樹の新作『1Q84』が出版されて何かと騒がれたが，本論は，村上春樹の大ベストセラーである『ノルウェイの森』(1987)の英語版の中で，日本文化の特色を帯びた部分が英語に移し変えられるときにどのような文化的なずれが生じているかということについての事例研究である。そして，さらに，それを通じて異文化理解や異文化コミュニケーションにおける問題点と共通の課題が含まれていることを再確認することを目的としている。

最初に「翻訳」とは何かというのは大変面倒な定義になるので，ここでは，「ある言語で表現された意味内容を起点言語(source language)から目標言語(target language)へ置き換えること」というきわめて単純な定義で済ませておきたい。また，言語はそれを話す人々の文化と切り離せない。したがって，翻訳という作業には自動的に文化の翻訳も含まれることを前提としている。

本稿のタイトル中の文化にカギカッコをつけたのは，ここで取り上げたのは日本の伝統的な大文字の文化，すなわち能・歌舞伎・茶道・いけばな etc.といったそもそも最初から外国語に移しようもない文化(ハイカルチャー)ではなく，より小さな，比較的に問題点として見過ごされやすい文化の事象に焦点を当てたという理由からである。それともうひとつ，異文化コミュニケーションに深く関わっている，日本語と英語の間の統語法の違いや論理構造の違いなどは，これから述べるようなデータ集めの事例研究とはまた別種の大きなテーマであり，ここでは一切触れていない。

村上春樹(1949-)の小説は，現在ではおよそ 45 カ国で翻訳されているということであり ―― ただ，中には英語版からの重訳もかなり多くあるという ―― 2006 年 3 月には東京で(一部は神戸と札幌でも)「国際シンポジウム＆ワークショップ　春樹をめぐる冒険 ―― 世界は村上文学をどう読むか」という大きな催しが開かれた。日本人の 4 人を入れて，17 カ国から 23 人の翻訳家と研究者が一堂に会して，村上春樹文学について日本語で討議をするという大変画期的な国際会議であった。そのシンポジウムの成果は，『A Wild Haruki Chase　世界は村上文学をどう読むか』(文藝春秋，2006)にまとめられ，アメリカやヨーロッパの国々を初め，韓国，香港，マレーシアなどの翻訳者が，村上春樹の文学が自国でどのように受け入れられているか，また，翻訳する際にどのような点に苦労したかなどが語られていて，非常に興味深いものとなっている。

村上春樹の文学は，現代の日本社会を背景としているし，川端康成，谷崎潤一郎，三島由紀夫などといったいわば日本近代文学の保守本流の作家と異なり，日本の伝統的な美意識をことさら強調したものではない。さらに，村上春樹の文章は，彼が若いときから米国の現代小説を読み漁りまたその多くを自分で翻訳してきたこともあって，基本的に米国小説の文体の影響を受けているといえる。それゆえ，彼の文章は一般的に英語には翻訳しやすいと思われているし，また，実際に英訳を読んでみるとそういう印象は否定できないことも事実である。しかし，原作と英語版をきちんと読み比べてみるとそれほど単純ではない事例が少なくないことも明らかになる。やはり，村上春樹という作家が日本に生まれ育ち，母国語としての日本語で小説を書く限り，そこには当然ながらものの考え方や感性も含めて日本文化が色濃く反映していないはずはない。

なお，本稿で参照した英訳版は，米国の Jay Rubin の訳による *Norwegian Wood* (Vintage Books, New York, 2000))である。実は，この訳の他に，やはり米国人の Alfred Birnbaum の手になるものがあるということだが，残念ながら私はこれまで目にしたことはない。ただ，現在では『ノルウェイの森』の英語版は Jay Rubin によるものが定訳ということになっているので，その点では研究の資料として問題はないと思う。そのほかにひとつ注意しなければならないのは，同じ Jay Rubin 訳となってはいても英国向けのヴァージョンがあり，スペリングは英国式，熟語なども英国の口語に変えられていたりする。訳者によると，英国で出版される際には，英国の編集者が米国版のスペリングや米国英語の口語表現などを英国式に手直ししてくれるという。しかし，注意して比較してみると，英国版にはただの細部の英語の違いだけではなく，いささか見逃せないような問題点も見つかるのだが，それについてはまた別の機会に譲りたい。

では，以下，方言，言葉遊び，擬音語・擬態語，食べ物，固有名詞(地名)，呼びかけの問題点という順で検討していきたい。

1　本稿は，2009 年度「多文化関係学会」北海道・東北地区研究会(2009.7.18.於藤女子大学北 16 条キャンパス)における講演に加筆したものである。

1. 方言

『ノルウェイの森』の中で方言が出てくるのは次の箇所だけだが，それゆえなお印象に残ったので，最初にこの問題を取り上げてみた。

「耳遠いから、もっと大きな声で呼ばんと聞こえへんよ」と女の子は京都弁で言った。(上，p.283)[2]
"He's hard of hearing," said the girl. "You have to talk loud or he can't hear."(p.138)

2 本稿の作品からの引用は，村上春樹『ノルウェイの森』上・下(講談社文庫，2004)による。

この英文の主語の he は年老いた犬のことだが，ここで京都弁そのものが英語に変換されないのは無理ないとしても，何と「京都弁で」までカットされてしまっているのは理解できない。ここは，たとえ標準英語にしか直せなくても，"in Kyoto accent" というのは入れておいても何の問題もなかったのではないだろうか。

実際，どの言語の方言も絶対に他の言語に訳すことは不可能である。したがって，谷崎潤一郎の「細雪」におけるように大阪弁そのものが小説の文化的背景として重要な場合には，ニュートラルな英語に翻訳されることによって，それだけで非常に大きな部分が失われてしまう。英語から日本語への翻訳の場合も同様で，たとえば英国には地方により色々な方言や訛りが際立っている。小説によっては，それが階級的な対立といったテーマ自体と関わってくる場合があり，方言や訛りを無視して日本語の標準語に置き換えるとそれがまったく読者には伝わらなくなるということになりかねない。

本稿の趣旨とは直接関係ないが，ひとつだけ興味深い実例として英国 20 世紀の小説家 D.H. Lawrence の *Lady Chatterley's Lover* (1928) の場合に触れておきたい。チャタレー卿夫人コニーの愛人となるオリヴァー・メラーズは，労働者階級の出身ながら，軍隊経験によりきちんとした標準英語を話すことができるのだが，ご主人様の前では土地の方言と訛りでしか応答しない。なぜなら，彼にとって地元の言葉は，チャタレー卿によって代表される英国の支配階級の価値に対して自らのアイデンティティーを守る砦としての機能を果たしているからである。しかも，メラーズの方言と訛りは，現代の理性的文明に対する「暖かな生命の世界」の象徴という役割さえ果たすように意図されている。

ところが，北海道出身の小説家・批評家の伊藤整がこの小説を完訳(『チャタレイ夫人の恋人』，1950)した際，メラーズの方言・訛りをすべて標準日本語に訳してしまった。そのため，この小説で方言と訛りのもつ思想性がすっぽりと抜け落ちる結果となった。伊藤整は，当時の英国における英語と階級の関係に対する意識を明確にもっていなかったのかもしれない。英語の方言を日本語のどの方言に置き換えるかという問題は別にして，少なくとも英国の社会においては，『チャタレー』のように方言や訛りの使用自体が作品の理解そのものと関わってくる場合があることに留意しなければならない。

2. 言葉遊び

次の項目は「言葉遊び」についてであるが，言葉遊びも他の言語には翻訳できない。英語から日本語の翻訳において，昔からシェークスピアやジェイムズ・ジョイス，『不思議の国のアリス』や『小熊のプーさん』にいたるまで，日本の翻訳者たちはいろいろと知恵を絞ってきたわけだが，原文の内容と等しい日本語に置き換えることはそもそも不可能なので，実際，ほとんどは訳者の創意工夫に委ねられている。

この項目を取り上げたのは，実は『ノルウェイの森』の中にも語呂合わせを使った場面があり，後で食べ物について検討する際にも再び取り上げるが，ただ面白いだけではなく，この小説の中で大変心を打つ情景と関係しているからである。

「キウリ？」と緑がびっくりしたようなあきれた声を出した。「なんでまたキウリなんてものがここにあるのよ。まったくお姉さんなにを考えているのかしらね。想像もつかないわよ。ちゃんと買い物はこれこれやっといてくれって電話で言ったのに。キウリ買ってくれなんて言わなかったわよ、私」
「キウイと聞きまちがえたんじゃないかな」と僕は言ってみた。(下，p.74)
"Cucumbers?! What are these doing in here?" Midori said. "I can't imagine what my sister was

thinking. I told her on the phone exactly what I wanted her to buy, and I'm sure I never mentioned cucumbers! She was supposed to bring kiwi fruit."

"Maybe she misunderstood you," I suggested.(pp.181-182)

すぐに分かるように，キウリとキウイは日本語では聴き間違いということは十分にありうるわけだが，英語の kiwi と cucumber ではとうてい間違いようのない果物と野菜である。結局英語では，緑の会話に「お姉さんに kiwi を買ってくるようにいったのに」と付け加えざるをえないことになり，そうするとどう考えても聞き間違いということはありそうにもなく，駄洒落的な面白さどころかなんとも間抜けた感じになってしまっているのは致し方ない。思い切って英語で聞き間違いやすい果物や野菜に書き換えるのもひとつの方法だろうが，そうすると，後で触れるように，キウリに醤油をつけて食べるという場面につながらなくなってしまう。したがって，ここでは書き換えもできないのが訳者にとっては苦しいところだったろう。

ついでながら，最初に触れた『A Wild Haruki Chase』という村上春樹の翻訳をめぐるシンポジウムをまとめた本の中で，「夜のくもざる」という短編を取り上げたワークショップがあり，その中の言葉遊びの翻訳について，台湾，インドネシア，ロシア，ハンガリー，デンマーク各国の翻訳者たちが話し合っている[3]。夜中の 2 時に書き物をしている「私」のところにくもざるが入り込んできて私の言葉の真似ばかりして仕事を邪魔するという，わずか 2 ページの短編である。

その中で，さるが真似を出来ないように「私」が「へっぽくらくらしまんがとてむや、くりにかますときみはこる、ぱこぱこ」というでたらめな言葉をいう。くもざるはそれをちゃんと真似してしまうのだが，面白いことに，中国語の翻訳者は発音の似た漢字を使って原作の音に忠実に訳し，ヨーロッパ系の訳者たちはみな割りと自由に自国語でそれらしく創作したということが報告されている。

それから，同じ作者の他の作品から例をあげれば，『神の子たちはみな踊る』という連作短編集の「蜂蜜パイ」の中で，主人公の淳平が小夜子の娘の沙羅に熊の「まさきち」と「とんきち」のお話をしてやる場面がある。その中で，彼が「とんきち」を「とんちき」といい間違えて沙羅に直される[4]。もちろん，英語では Tonkichi が Tonchiki になるだけで[5]，脚注も何も説明があるはずもなく，トンチキと言い間違えた時のこっけい味は伝わりようがない。「夜のくもざる」のように初めから意味のない言葉の羅列は自由に置き換えが許され，英語の読者にも明らかに言葉遊びだと伝わる部分だが，キウリとキウイや今の例などは，英語の読者はコンテクストの中で原文の言葉遊びにはまったく気がつかないまま読んでしまう箇所だろう。

3 pp.177-194.

4 村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』(新潮文庫，2002)，p.225.

5 Haruki Murakami: *After the Quake* (The Harvill Press, London, 2002), p.125.

3. 擬音語・擬態語(ONOMATOPOEIA)

次に擬音語・擬態語の英訳について検討したい。これは「文化」というよりも言語学的なレベルの問題になるかと思うが，日本語には擬音語・擬態語が非常に多くあり，欧米の言語でははるかにその数が少ないことはいうまでもない。いちばん単純な例をあげれば，「雨がざあざあ降っている」は，英語では「ざあざあ」という擬音はなく，"It's raining heavily." とか，せいぜい "Its' raining cats and dogs." というしかない。逆に英語では —— 西欧語全体も同様だろうが —— 基本的に単語自体の中に擬音的効果が含まれていることがふつうで，bang, thump, crash, howl, mumble, sigh, whisper などいくらでも例をあげることが出来る。slip や slide といったごく普通の英単語ですら「つるっと」あるいは「するする」すべるという音感をもっていると考えられる。詩や劇で英語の方が日本語よりずっとドラマティックになるのは，英語のリズムの他に語の音自体の響きの効果も大きい。

このような言語的側面をどうして取り上げたかというと，『ノルウェイの森』全体の中に，ざっと 40 数項目の擬音語・擬態語が使用され，その翻訳に関して日英文化の対比という点から見ていくつか興味深い現象が見られるからである。以下，実例に沿っていくつかの種類に分けて検討してみる。

最初に，「くすくす笑って」(下，p.170)のように "chuckled"(p.230)という擬音を含んだ語がうまく当てはまる場合もあるが，やはり，日本語の擬音語・擬態語をうまく英語に移せなかったというか，英語に equivalent(等価)な表現が見つからなかった例が多く見られる。たとえば，「おいおい泣いて」(下，p.28)，「猿みたいにわあわあ騒ぎまわるしつけのわるい中学生」(下，p.220)，「コロッてずれてるのよ」(下，p.256)，すき焼きが「ぐつぐつと」煮える(下，p.277)などは，英訳では擬音的要素はすべてカットされている。それでも意味は何の問題もなく伝えら

れるわけだが，たとえば次のような例はどうだろうか。

緑はときどききゅっきゅっとスカートの裾をひっぱって下ろした。（下，p.62）
Midori would yank on hers [her skirt] every now and then to bring it down.（p.175）

これは，トオルとデートのとき，緑が超ミニのスカートをはいて電車の中で向かいの乗客の視線を気にしながらスカートの裾を引っぱる場面だが，この「きゅっきゅっと」という擬音が無くなるのは実に惜しい気がする。もうひとつ，次の例はどうだろうか。

緑は何も言わずにがっちゃんと電話を切った。（下，p.250）
Midori hung up without a word.（p.272）

“hang up” には「電話を一方的に切る」の意はあるものの，ここで「がっちゃん」に込められた緑の強い拒絶の感情は残念ながら伝わらない。また，次もなかなかいい例である。

…寮の玄関を出て大学につくまでに僕はだいたい三十六回くらいコリコリとねじを巻きます。（下，pp.104-105）
...I give it some thirty-six good twists by the time I've...left the dorm and arrived at the university.（p.197）

この「コリコリとねじを巻く」── これはすぐに作者の『ねじまき鳥クロニクル』を連想させる ── というのもやはり捨てがたいニュアンスがあるのではないだろうか。
以上はうまく英語に置き換えられなかった例であるが，次に，訳者が原文の擬音の持っている感覚を何とか英語に移し変えようと努力していると思われる例を見てみよう。

「ひゅううううう、ポン、それでおしまいだもの」（上，p.14）
Aaaaaaaah!　Splat!　Finished.（p. 6 ）

「ひゅううううう」というのは，本当は直子が語る「野井戸」なる深い井戸に人が落ちる音そのものを表現しているわけだが，英語の “Aaaaaaaah!” は落ちていく人間の悲鳴に置き換えられている。日本語の引き伸ばされた音に相当するいい英語が他に見つからなかったのだろう。これと似たようなのは，「そして彼女の最後の科白が頭の中でこだまみたいにわんわんと鳴りひびいているのよ」（下，p.26）で，“echoing and echoing”（p.157）と二つ重ねて感じを伝えようとしている箇所などに見られる。次の例も同様な工夫といえる。

彼の方はぷんぷん怒っちゃうし…（下，p.153）
My boyfriend got *sooo* mad...（p.221）

その他に，「ちゃらちゃらしたお嬢様学校」（下，p.118）に対して “this hotity-toity establishment”（p.205）といったどことなく日本語の音の感じを生かそうとしたと思われる表現や，「味噌汁を飲みながら」（下，p.149）を “slurping miso soup”（p.219）とわざわざ英語の「すする」の意味をもった語を使うといった点に訳者の工夫が見られる。さらに次の二つの例などもなかなか良く訳されているところだと思う。

ときさえもがそんな僕の歩みに合わせてたどたどしく流れた。（下，p.180）
Time itself slogged along in rhythm with my faltering steps.（p.236）

…僕と僕の時間だけがぬかるみの中をぐずぐずと這いまわっていた。（下，p.180）

...while my time and I hung back, struggling through the mud.(p.236)

「たどたどしく」には，“slog”(重い足取りで歩く，とぼとぼ歩く，…の中を苦労して進む)という擬音的な動詞が使われているし，「ぐずぐずと」に当てられた “struggling” というのは日本語の意味よりももっと前向きな要素が入るような気もするが，音自体に多少苦闘するという感じが無いともいえない動詞を使って，うまく語り手のむなしさ・倦怠感・徒労感を出そうとしている。とはいえ，やはり「たどたどしく」と「ぐずぐずと」というもとの日本語の音から伝わる語感は英語に変えようがないものだ。

この類の擬音語・擬態語は「もやもやした」とか，「むらむら」「めらめら」「じわじわ」など日本語にはいくらでもあって，音そのものが肉体的・生理的な感覚の表現と密接に結びついているところにいかにも日本的な特徴があるので，なかなか他の言語の副詞や動詞には簡単に置き換えられない性質をもっている。ただ，外国で日本の漫画や劇画の翻訳の際には，日本語の擬音をそのまま使う例もあるようだから，日本語のもつ擬音効果については意外に広く認知されつつあるのだろう[6]。先に見た「ひゅうううう」も，漫画だったら，“Hyuuuu” のまま，字体とフォントの大きさを工夫して「翻訳」されたところかもしれない。

さて，擬音語・擬態語についての最後に，繰り返しにはなるが，どうしても忘れられない例をひとつあげておかねばならない。言葉遊びの項でみたキウリとキウイの聞き間違いに続く場面で，トオルが，病室で脳腫瘍のために死にかけている緑の父親としばらく一緒の時間を過ごすときのエピソードである。少し前後を含めて引用しておきたい。

「腹が減ったんでキウリ食べちゃいますけどかまいませんかね」と僕は訊いた。緑の父親は何も言わなかった。僕は洗面所で三本のキウリを洗った。そして皿に醤油を少し入れ、キウリに海苔を巻き、醤油をつけてぽりぽりと食べた。

「うまいですよ」と僕は言った。「シンプルで、新鮮で、生命の香りがします。いいキウリですね。キウイなんかよりもずっとまともな食い物です」

僕は一本食べてしまうと次の一本にとりかかった。ぽりぽりというとても気持ちのいい音が病室に響きわたった。(下，pp.91-92)

“I’m going to eat some cucumbers if you don’t mind,” I said to Midori’s father. He didn’t answer. I washed three cucumbers in the sink and dribbled a little soy sauce into a dish. Then I wrapped a cucumber in nori, dipped it in soy sauce and gobbled it down.

“Mmm, great!” I said to Midori’s father. “Fresh, simple, smells like life. Really good cucumbers. A far more sensible food than kiwifruit.”

I polished off one cucumber and attacked the next. The sickroom echoed with the lilt of cucumbers crunching.(p.191)

大変に印象的な美しい場面である。死にかけている老人と20歳になろうとしている若者，そして病室の独特のにおい対新鮮なキュウリの香りとそれをかじる音 ── 死と生の見事な対比がここにある。この場面における「ぽりぽり」という音は実に効果的に使われていて，他に置き換えようが無いのではないか。このあと，この香りと音に触発されてろくに食事のとれない緑の父親もトオルからキウリを食べさせてもらうことになる。そのとき父親がキウリをかじる音が，後に直子への手紙の中の中で「ポリ、ポリという小さな音」(下，p.104)とカタカナで表されて，それが大変哀れをそそる。さらにあとで，アルバイトで知り合った芸大の画学生と酒を飲みながらキウリとセロリに味噌をつけて食べる場面(下，p.220)でも，やはりこの「ぽりぽり」という音が死んだ緑の父親を思い出させる契機となるわけである。

実をいうと，私が英訳版を読んで原文の擬音語・擬態語を考察の対象にしようと考えたのは，この日本語の「ぽりぽり」という音が意外に感動的な効果を発揮しているのに気がついたときであった。英語では，引用した場面では “gobble down”，“crunching” が使われている。たぶん “crunch” という擬音的な単語がいちばん「ぽりぽり」に近いのかもしれないが，この日本語の「ぽりぽり」という音は，他の言語に置き換えたときに失われるものは大変大きいと私には思われる[7]。

6 『A Wild Haruki Chase』，p.170 参照。

7 『ノルウェイの森』のドイツ語版 *Naokos Lächeln: Nur eine Liebesgeschichte Roman* (btb, München, 2003)では “Schmatzen”(p,275)という語が使われているが，これもただ「おいしそうに音を立てて食べる」くらいの意味。

少し長くなったが，以上で擬音語・擬態語についての検討は終わりにしたい。ただ，最後にひとつだけ，『A Wild Haruki Chase』で取り上げられた「スパナ」という短編についてのワークショップ(pp.161-177)の中で，「グシャッ」という擬音 ── 何と女性がスパナで男の鎖骨を砕く音！ ── の翻訳に各国の皆さんがいろいろと苦労したことが話されていて大変興味深いことを付け加えておく。

4. 食べ物

次は食べ物についての検討に入るが，これは調べてみるとなかなか興味深い項目である。本来，食べ物はカッコつき文化というよりは大文字の文化というべき文化の事象で，本論で取り上げるのは趣旨に反するかもしれない。とはいえ，『ノルウェイの森』が日本文学である限り，どんなに時代背景が新しくても日本の食べ物の描写が出てくることは免れず，実は英訳を読んでいるとどうしても気になるところが数多くある。日本の食べ物がどのように英語に置き換えられているかについて検討することは，翻訳による文化の変容を見る上で格好の題材のひとつなので，あえてここで取り上げてみることにした。

この小説の中には，先ほど擬音の「ぽりぽり」のところで見たキウリに醤油あるいは味噌をつけて食べるといったところも含めると，全体でおよそ 20 種類の食べ物および食べ物関連の単語が出てくる。まず，ひとつ実例を見てみよう。

> 鯵の酢の物に、ぽってりとしただしまき玉子、自分で作ったさわらの西京漬、なすの煮物、じゅんさいの吸物、しめじの御飯、それにたくあんを細かくきざんで胡麻をまぶしたものがたっぷりとついていた。味つけはまったくの関西風の薄味だった。(上，p.142)
>
> ...an amazing assortment of fried, pickled, boiled and roasted dishes using eggs, mackerel, fresh greens, eggplant, mushrooms, radishes, and sesame seeds, all done in the delicate Kyoto style.(p.67)

これは難題だっただろう。さすがにこれらの料理をひとつひとつ個別に英語に移すのは難しかったとみえて，英訳では料理法と料理の素材とに分けただけ，そして「たくあん云々」のところは radishes だけで済ませてしまっている。正直言ってこれを英語で読む外国人には，わあっといっぱい料理があるなあという印象だけで，何が fried で何が boiled なものやら全然見当もつかない有様になっている。さらに，「関西風の薄味」が「繊細な京都風に」でいいかどうかもいささか問題になるだろう。

そうはいっても，原文の日本料理をひとつひとつ丁寧に英語に移し変えても，ここにあげられた日本料理の現物と味を知らない英語の読者には内容までは伝わるはずもない。それが大文字の文化の翻訳の難しさだろう。ここで訳者は，個別に訳し分けてもどうせ通じるはずもないのだから，このとき緑が腕によりをかけて作った料理全体の種類の多さをひとまとめに伝えるだけしかないと考えたのかもしれない。それはそれでひとつの翻訳のストラテジーだと思われる[8]。

一方，これとは変って，次にあげるのは原文の食べ物をほとんど直訳的に英語に移し変えただけの例である。緑という女性の口調がよくわかる面白いパラグラフである。

> ある日私たち夜中の政治集会に出ることになって、女の子たちはみんな一人二十個ずつの夜食用のおにぎり作って持ってくことって言われたの。冗談じゃないわよ。そんなの完全な性差別じゃない。でもまあいつも波風立てるのもどうかと思うから私何も言わずにちゃんとおにぎり二十個作っていったわよ。梅干入れて海苔まいて。そうしたらあとでなんていわれたと思う？　小林のおにぎりには中に梅干しか入っていなかった、おかずもついていなかったって言うのよ。他の女の子のは中に鮭やらタラコが入っていたし、玉子焼きなんかもついていたりしたんですって。(下，p.68)
>
> "Well, one time they called a late-night political meeting and they told each girl to make twenty rice balls for midnight snacks.　I mean, talk about sex discrimination!　I decided to keep quiet for a change, though, and showed up like a good girl with my twenty rice balls, complete with *umeboshi* inside and nori outside.　And what do you think I got for my efforts?　Afterwards people complained because my

8 ドイツ語版 *Naokos Lächeln* では，料理をひとつひとつドイツ語に直す努力をしている(p.102)。

rice balls had only *umeboshi* inside, and I hadn't brought anything along to go with them! The other girls stuffed theirs with cod roe and salmon, and they included nice, thick slices of fried egg.(pp.178-179)
(下線部筆者)

いつも思うのは,「おにぎり」は和英辞典にもたいてい rice ball という英語が載っているのだが,これで理解してもらえてきたのかということである。英語圏の読者が,たぶん昔からこれは何だろうかといろいろ調べ,実物にぶつかってはじめてああそうか,こういうものなんだと合点してきたような英語なのではないだろうか。少なくとも,私の経験からは,rice ball というのは普通の英国人にはとうてい理解してもらえない英語訳だと思う。ちなみに,研究社『新和英大辞典』第五版の定義は,"a rice ball; a palm-sized triangle ball or cylinder of cooked rice usually wrapped in a thin sheet of dried seaweed and stuffed with a pickled plum, some tuna or salmon flakes, fish eggs, spicy vegetables, or other fillings" となっているが,これだけ詳しい辞書的定義をもってしても,やはりおにぎりを知らない人には想像がつかないシロモノだろう。

その一方,ウメボシやノリはそのまま ── nori は今は英米の英語辞典に載っているかもしれないが umeboshi[9] はどうだろうか ── そして鮭はもとの魚のまま,タラコも「タラの卵」(!)の直訳のままという処理の仕方になっている。率直な感想をいわせてもらえば,salmon と cod roe の入った rice ball というものについては,やはり普通の英国人であれば今でも何か恐ろしいものを想像するだろうと思う。寿司が世界に知られている今は,「日本人の食べるナマの魚」に対する生理的嫌悪感は昔よりも遥かに薄れてきているのは事実だろう。しかし,もし,おにぎりの中に入っているのが焼いた塩鮭と加工したタラコであることを知らなければ,いくらこの青春小説の主人公たちが魅力的で小説のテーマが普遍的でも,『ノルウェイの森』を読んだほとんどの外国の人々は,日本人は何というものを食べているのかとゾッとするに違いない。

9 『新和英大辞典』では単に "a pickled *ume*(plum)"。

他に「僕と緑は鰻屋に入って鰻を食べ」云々(下,p.158)という箇所もあるが,鰻屋は "an eel shop"(p.224)と直訳,「鰻を食べ」はカットされている。ロンドンのテムズ川下流で庶民が伝統的にウナギを食べているというテレビ番組を見て仰天したことがあるが,これは例外中の例外で,普通の欧米人,とくにゲルマン系の人々はどんなウナギ料理を想像するか心配になる。ただ,スペイン人や南フランスの人々なら違う反応をするかもしれないけれど。

さて,以上の二つの例では,食べ物の翻訳に際してその概略をまとめる形のものと,英語に入り込んでいる日本語あるいは日本語の直訳を使った例を見たが,次に別のストラテジーを用いた例を見てみたい。

我々は地下の食堂に行き、ウィンドウの見本を綿密に点検してから二人とも幕の内弁当を食べることにした。(下,p.226)
Midori and I went to the basement restaurant and, after a close inspection of the plastic food in the window both decided to have an old-fashioned cold lunch assortment with rice and pickles and grilled fish and tempura and teriyaki chicken.(p.260)

我々は半月形の弁当箱に入った幕の内弁当をきれいに食べ、吸い物を飲み、お茶を飲んだ。(下,p.228)
We finished all the little fried and grilled and pickled items in the separate compartments of our fancy lacquered half-moon lunch boxes, drank our clear soup from lacquered bowls and our green tea from those white cups.(p.260)

トオルと緑がデパートの高島屋の地下のレストランで昼食をとる挿話である。ここでは,「幕の内弁当」という日本語そのものは省略し,"an old-fashioned cold lunch assortment" と言い換えて,さらにその日本食の内容をいわば辞書的に説明する形で翻訳している[10]。しかも,その弁当の内容が「御飯に漬け物,焼き魚に天ぷらに鳥肉の照り焼き」という,日本語の原文にはない細かな具体的なものになっている。幕の内弁当の内容は様々な組み合わせがあるはずなので,上記の例がどこからきたかと考えると,下司の勘繰りかもしれないが,実はこれは訳者がどこかで ── 高島屋で! ── 実際に自分でそれを食べたときの内容をそのまま記録したのではないかなどと考えたくなる。まったく日本語にはない「漆塗りの椀」も「白い茶碗」も,そのときの経験かもしれない。

10 『新和英大辞典』では,"a box lunch containing from 10 to 15 different small portions of food to go with the white rice" と簡単に説明されているだけ。

さらに，食については，他に餅と雑煮（“rice cakes and soup” で分かるか？），トオルが友だちと七厘でシシャモ（！）を焼いて食べながらウイスキー（友人が実家からせしめてきたスコッチのシーバス・リーガルで当時は高級舶来品）を飲むシーンや，「定食屋」（“café” と訳されている）で食べる朝ごはん，さらに稲荷ずし[11] の果てまでいろいろな興味深い例があるが，どの場合も英訳は上で見た三種類のどれかで処理されているわけである。

ただし，実はもうひとつ究極の奥の手があって，それは何と省略してしまうことである。見事に省略された例は，かつて東海道線の御殿場駅で売っていたはずの駅弁の「鯛めし」（下，p.260）である。なるほど，駅弁・鯛めしともに説明なしには英語に訳しようがない。訳者の Jay Rubin はいっさい注釈をつけない主義なので，上の幕の内弁当のような例外を除いてあまり長くなる説明的な英語は必要ないと判断したのであろう。

いずれにしても，繰り返しになるが，どんな日本の食べ物も，外国人の読者がもとの日本食そのものを知らない限り，どのように英語に翻訳されてもたぶん見当もつかないエキゾチックな食べ物で，村上春樹という現代の小説家による現代的なテーマを扱った作品の中ですら，そこに不思議な日本情緒を感じることになるかもしれない。一方，逆に寿司などは，アメリカはもちろんヨーロッパでも広く知られているので問題はなさそうに見えるが，彼らの考える sushi はけっして寿司ではなく，作品に出てくる寿司を初めとする日本料理に対して適切ではないイメージをもたせる ── イメージをゆがませる ── ことになる可能性もある。（札幌のアイリッシュ・パブという看板を掲げている店がまったくアイルランドのパブとは似ても似つかないことがあるように）

英語から日本語へという道筋はまた別の話になる。今はわれわれの学生時代と違って西欧やアジアの食べ物が日本にあふれているので，カタカナに直すか漢字にルビを振るだけで大体のところは日本人に分かるようになっている[12]。それでも，イギリスの Yorkshire pudding のようなものは，いくら辞書で調べても実物を見て食べてみなければ絶対にどんな食べ物か分からないし，apple でさえわれわれの思うリンゴと同じとはいえない。英国の翻訳論の大家 Susan Bassnett 教授は，彼女の著書 *Translation Studies*（Routlesge, 2002）の中で，ヨーロッパの国どうしでさえ，イギリスのチーズとイタリアのチーズはモノ自体もそれに付随する象徴的意味も異なることを指摘している（同書，p.26）。これは記号論の問題に発展することになるので，ここでは触れるにとどめておきたい。

11 下，p.255。実は，ここでは原文に「稲荷」とだけ書かれているので，訳者は「稲荷ずし」のことだと分からずに “deep-fried tofu skins”（p.275）と誤訳している。

12 逆に，中国や台湾の翻訳者は，「カフェ・オレとケーキ」のような簡単なものからイタリア料理やフランス料理の名前まで，カタカナ語を中国語化するのに苦労しているというのが興味深い。（『A Wild Haruki Chase』，p.9）

5．固有名詞（地名）

次に小説の中の固有名詞，ここではとくに地名の翻訳について検討してみたい。私が地名の翻訳について興味を持つようになったのは，前に言葉遊びのところで触れた『神の子どもたちはみな踊る』という連作短編集を英訳（やはり Jay Rubin の訳）で読んだときだった。前出の「蜂蜜パイ」という作品の中で，「小夜子は浅草の生まれで」（p.169）という箇所が以下のように訳されている。

> Sayoko is a real Tokyo girl.　She came from the old part of town where the merchant class had lived for centuries.（*After the Quake*, p.110）

「浅草」は省略され，その代わりに伝統的な下町に育ったという説明がなされているわけで，これは，ちょうど食べ物の「幕の内弁当」と同じストラテジーといってもいいかもしれない。一方，「アイロンのある風景」という作品では，「水戸の老舗の菓子店」をただそのまま英語に置き換えて水戸には何の説明も加えられていない。浅草を上のように敷衍するのならば，水戸にも「江戸時代には将軍家の御三家のひとつによって治められた」といった説明があってもしかるべきではないかという気もする。また，「UFO は釧路に降りる」という短編では，妻に家出された男が釧路を訪れるのだが，ここでも釧路という北海道の最果ての港町というイメージはひとつも触れられていない。東京からの距離感，演歌的イメージなど，日本人ならばたいてい抱く（はずの）イメージ ── この短編には熊に関する大変ユーモラスなエピソードもラーメンも出てくる ── がないと，釧路まで行くというのはどういうことなのか他の国の人々には伝わりにくいのではないかと思う。

翻訳家の青山 南は，著書『英語になったニッポン小説』（集英社，1996）の中で，村上　龍の《69》（*Sixty-Nine*）という小説 ── この小説は 1960 年代の日本のポップカルチャーのカタログみたいなものらしいが ── の英訳を論じている中で，「翻訳者泣かせの筆頭にあがるもの，それは固有名詞である」（同書，p.30）として，英語化に際して採られる次の四つのストラテジーをあげている。

①字面を訳す
②訳すのではなく，説明する
③他の固有名詞に変える
④消す

この場合は主として人名について述べているのだが(たとえば，天才バカボンや林家三平をどう英語にするか？)，実は同じことは地名についても当てはまるのである。先に見た「蜂蜜パイ」の「浅草」の例は②，水戸や釧路は①に相当する。③の「他の固有名詞に変える」という信じられない例は，《69》の中では原文の浅丘ルリ子がブリジッド・バルドーという当時のフランスの女優に変えられた傑作な例をあげている。ただ，『神の子どもたちはみな踊る』の中の地名に関する限りそのような極端な方法は見当たらない。

『ノルウェイの森』の中の地名は全体としてそのまま英語に置き換えられている例が多いが，多少説明が加えられた例もまた同じくらい多く見られる。次の例はその代表的な例のひとつである。

ねえ、知ってる？　私の学年百六十人の中で豊島区に住んでる生徒って私だけだったのよ。(上，p.128)
I was the only one from a middle-class neighborhood like Toshima.(p.60)

緑は町の小さな本屋の娘なのだが，親の見栄からハイソサエティの子女のための名門女子高に通わされていたことを話している場面で，私にもよくは分からないが，豊島区北大塚が中流階級的地域(原作では，中の下といった感じだが)であると訳者が説明を加えているわけである。次も同様の例である。

「そう。奈良って昔から好きなのよ」(下，p.153)
“Yeah, I’ve always liked that place. The temples, the deer park.”(p.221)

奈良のような世界的に有名な場所にわざわざ「お寺とか，鹿のいる公園とか」という説明をつける必要があるかどうか，いささか理解しにくいところである。多くの例をあげている余裕はないので後は省略するが，ときどき説明のあるなしの理由がどうもいまひとつはっきりしないような場合がある。奈良の補足説明があって，どうして緑が旅行してきた弘前，下北，竜飛など，東北地方の地理的文化的意味合いの簡単な補足説明がないのか，また，トオルが直子の死に絶望して歩き回る山陰の海岸 ── 鳥取県とか兵庫県 ── についても少しも地理的なヒントがなくてもいいのか，そのあたりの基準がどうも明確ではないように思われる。

さらに，何と，青山 南による固有名詞翻訳四カ条の中の「消す」という例も実際にあるのには驚いた。先に触れた緑の通ったお嬢様学校の話の続きで，そこの生徒たちが住んでいた地域のことに触れた次のような文がある。

すごかったわねえ、千代田区三番町、港区元麻布、大田区田園調布、世田谷区成城…もうずうっとそんなのばかりよ。(上，p.128)
...and every single one of them was from a rich area.(p.60)

ここではすべての地名が見事に消されてしまっている。確かにこれらの地名は英語圏の一般読者にはほとんど意味を持っていないにしても，この原文の列挙の勢いはやはり捨てがたい気がする。そのままアルファベットに置き換えても結構迫力が伝わるはずで，「…みたいなお金持ちの住む地域」などと英語に直しても良かったのではないだろうか。そのすぐあとに「一人だけ千葉県柏っていう女の子がいてね…」(上，p 128)という文が来るが，ここも柏という地名は消されて，その代わりに “Well, no, there was one girl from way out in Chiba with farmers...”(p.60)という説明が加えられていたりする。その他，第二章でトオルが直子と東京の街をひたすら歩く場面では，JR の市ヶ谷は省略されているのに(p.18)，四ツ谷駅には “...in Yotsuya where the green embankment makes for a nice place to walk by the old castle moat.”(p.19)などという補足説明がついている。やはり，省略と補足の基準についていささか疑問が残らざるを得ない。

面白いのは，青山 南の日本語固有名詞英訳の四つのストラテジーは，食べ物の翻訳の例とまったく重なること

である。この小説の中では，さすがに食べ物・地名とも別物に変えるという例は見られないにしても，結局原文そのままか，説明するか，消すかという方策を取っている点では共通している。これは，文化が色濃く反映している事項の翻訳の場合には，必然的にこの四つの方策のどれかを採用せざるを得ないということを示しているといえよう。

最後に，いささか蛇足になるが，補足説明の例として北海道の人間にとっては大変面白い箇所をあげておきたい。

（「これから先どうするんですか、レイコさんは？」）
「旭川に行くのよ。ねえ、旭川よ」（下，p.262）
“I'm going to Asahikawa,” she said. “Way up in the wilds of Hokkaido! ...”（p.278）

旭川を二度繰り返す代わりに，訳者は地名に「ずっと北の北海道の荒野の中の」という説明を付け加えている。ここはどうしても旭川の位置とイメージを解説せざるをえなかったわけだろう。この後すぐ，レイコさんは「だってそうでしょ。やっと自由の身になって，行き先が旭川じゃちょっと浮かばれないわよ。あそこなんだか作りそこねた落とし穴みたいなところじゃない？」と追い討ちをかける。（英訳ではどういうわけか「作りそこねた」がカットされている）このレイコさんの旭川に対するコメントは，本州の人々の北海道に対する先入観を正直に表しているのかもしれず，なかなか忘れられない地名の用い方のひとつである。

このように，地名はただの場所ではなく「文化」であり，場所によって濃い・薄いはあれ，そこにはその土地にまつわる消しがたい文化的連想が沁みこんでいるわけである。村上春樹の『羊をめぐる冒険』と『ダンス・ダンス・ダンス』では，札幌の「いるかホテル」なるところが，語り手が異次元に住む羊男と出会って新たに社会との「つながり」を求める出発点となっている。札幌という，伝統的な日本文化の呪縛の外にある都市だからこそそのマジックが成立するのであり，これが福島とか新潟，金沢では羊男の存在とその後の物語の展開は読者を納得させられなかったかもしれない。当然ながら，札幌という舞台の特殊性も予備知識のない外国の読者には理解してもらうのは無理であり，何らかの説明を加えたり，その国の文化への置き換えをするという工夫が必要となるかもしれない。

この項の最後に，『ノルウェイの森』ではないが，同じ作者の作品の中に文化との連想ということでどうしても触れておきたい地名の例がある。いささか長くなるがその部分を引用する。

札幌までの列車の中で、僕は三十分ほど眠り、函館の駅近くの書店で買ったジャック・ロンドンの伝記を読んだ。ジャック・ロンドンの波瀾万丈の生涯に比べれば、僕の人生なんて樫の木のてっぺんのほらで胡桃を枕にうとうとと春をまっているリスみたいに平穏そのものに見えた。少なくとも一時的にはそういう気がした。伝記というものはそういうものなのだ。いったい何処の誰が平和にこともなく生きて死んでいった川崎市立図書館員の伝記を読むだろう？　要するに我々は代償行為を求めているのだ。（村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』，講談社文庫，2008，上，p.58）

I slept for thirty minutes, and the rest of the trip I read a biography of Jack London I'd bought near the Hakodate Station. Compared to the grand sweep and romance of Jack London's life, my existence seemed like a squirrel with head against a walnut, dozing until spring. For the time being, that is. But that's how biographies are. I mean, who's going to read about the peaceful life and times of a nobody employed at the Kawasaki Municipal Library? In other words, what we seek is some kind of compensation for what we put up with.
（*Dance Dance Dance*, translated by Alfred Birnbaum, Vintage Books, 1995, p.20）（下線部筆者）

私は川崎市に行ったことはないし，実際，川崎市がとくに退屈で索漠とした非芸術的な灰色の町ということもないだろう。したがって，この箇所は，特筆するような事件もなく静かで平凡な人生を送った地方公務員という意味では，別にどこの地方都市の市立図書館員でもよかったはずだ。しかし，「川崎市立図書館員」という言葉の選び方は，やはり日本人の読者にはなんとなく納得できるイメージなのだと思う。そして，英語圏の読者にもこ

の箇所の内容自体はどんな日本の地名であれ十分に伝わるところではあるにしても，「川崎市」という場所の選び方の絶妙さはどうしたって彼らの理解から抜け落ちてしまうことも確かだろう。(それにしても，川崎市立図書館員の方々は村上春樹に抗議文を送らなかったのだろうか？)一方，これと逆のことは当然英語から日本語への翻訳でも日常的に起きているわけで，翻訳においては，地名ひとつをとっても，私たちが意識しないところで多くの文化的情報がこぼれ落ちていることを改めて確認しておきたい。

6.「ねえ、ワタナベ君」と "Hey, Watanabe" の間 ── 文化の変容

さて，これまで，『ノルウェイの森』の英訳の中の方言と言葉遊び，擬音語・擬態語，食べ物および地名に関して，翻訳者による置き換えのストラテジーのいくつかを見てきた。最後に，これら以外に，単純な誤訳というのとは少し違う，訳者が日本語と日本文化の関わりを十分に理解していなかった例，あるいは，自国の文化に引きつけて翻訳したために意図しない問題が生じたと思われる部分をいくつか取り上げておきたい。まず，次の例は日本的な心理に深く関わる日本語の解釈に問題がある例のひとつである。

> でもあの人たち[父親と母親]はただの一度もそういうの与えてくれなかったわ。甘えるとつきとばされて、金がかかるって文句ばかりいわれて。(上，p.160)
>
> But they never gave that to me.　Never, not once.　If I tried to cuddle up and beg for something, they'd just shove me away and yell at me.　'No!　That costs too much!' It's all I ever heard.(p.76)

これは，緑が父と母に十分愛されなかったこと，いかに自分が親の愛に飢えていたかということをトオルに告白している場面で，「そういうの」とは親の愛情のことである。ところが，英文の文脈では，「甘える」=「何か買ってほしいとねだる」と解釈し，そんなものは高すぎて買えないと親が怒鳴るという意味になってしまっている。残念ながら親の愛情が欲しくて「甘える」という意味が訳者には分かっていない。「金がかかる」も，そもそも親たちが自分たちの見栄から娘を有名私立女子高に入れたことに言及しているわけで，緑がとくに何か高いものを買ってくれといっていることに対する文句ではない。土居健郎が『甘えの構造』を著したのはもう30年前になるが，日本人の「甘える」という心情は，米国の日本文学研究者にとって今でも理解の難しい問題なのだろうか。

次は，日本文化と米国文化の違いに関わると思われる例を考えてみたい。

> 「私の胸かあそこ触りたい？」
> 「さわりたいけど、まださわらない方がいいと思う。…」(下，p.239)
> "Want to touch my breasts, or down there?"　Midori asked.
> "Oh boy, I'd love to, but I'd better not."(p.266)

私には，この "Oh boy" が大変気になる。緑とトオルが長い経緯を経てはじめて抱き合うシーンだが，確かに二人とも多少標準からずれている若者で，布団 ── 当然英語は her bed ── の中でも言葉の上ではふざけあっているものの，基本的に真剣に自分の生き方を求め続けている男女なのだ。この場合も二人はまだお互いの間の心理的バリアをクリアーできないでいる状態であり，いくら興奮しているといってもトオルの口から "Oh boy" というようなふざけた言葉が出るのはまったくふさわしくないと思う。これは文脈の解釈の違いというよりも，やはり米国文化の影響というか，こういう二人がこういう場面だったらこういう科白が自然に出てくるだろうという無意識の反応があるのではないか。自国の文化のバイアスが意識しないで出てしまった例かと思うのだが，果たしてどうだろうか[13]。

これに関連して，最後に，本稿のタイトルにした「ねえ、ワタナベ君」と "Hey, Watanabe" のズレが意味するものについて検討してみたい。実は，まずカタカナ表記について，英語を初めヨーロッパ語ではすべてひらがなや漢字と区別なく音訳されることもひとつの問題になるのだが，直接今のテーマと関わりがないのでここでは触れないでおく[14]。

「ねえ、ワタナベ君」が英訳の中ですべて "Hey, Watanabe" と翻訳されているわけではないが，まず実際の例を

13　英国版は "Oh, wow" となっていて，ただ米国版を書き換えただけで，中味は同じ。

14　『ノルウェイの森』では，語り手はワタナベ・トオル，トオルの親友で直子の恋人だったのはキズキ，寮の先輩永沢さんの恋人はハツミさんとカタカナで表される。この表記の区別自体が何を意味するのかは別にして，『A Wild Haruki Chase』の中で，頼明珠という台湾の翻訳者が，村上作品中のカタカナ名の翻訳の難しさと工夫について語っている(p.87)。

見てみよう。次に挙げたのは，緑がトオルに呼びかける典型的な例のいくつかである。

ねえワタナベ君、私たち下の食堂にごはん食べに行かない？（下，p.81）
Hey, Watanabe, let's go down to the cafeteria.（p.185）

ねえ、ワタナベ君、怒ってる？（下，p.205）
Hey Watanabe, are you mad at me?（p.249）

ねえ、ワタナベ君、他の女の人のこと考えてるでしょ？（下，p.238）
Hey, Watanabe, I bet you're thinking about that other girl.（p.266）

文脈はいろいろだが，次にあげるのはそのヴァリエーションである。

ねえ、どうしたのよ、ワタナベ君？（下，p.204）
Shit, Watanabe, what happened to *you*?（p.249）

また，次のように，本来原文にないのに呼びかけを付け加えた例もある。

あなた意外にいろんなこと知らないのね。（下，p.237）
Hey, Watanabe, there's a lot of stuff you don't know.（p.265）

このように，「ねえ、ワタナベ君」が "Hey, Watanabe" に移し変えられているのを見ると，翻訳とは文化の衝突なのだとつくづく思わざるをえない。いくつかの要素が絡み合っているが，まず，ワタナベ君の「君」が翻訳できないことにより，日本の若い男女の欧米とは異なる独特の距離感 ── いまでもそうなのかどうか確信は持てないけれど ── が失われてしまう。さらに，英語の読者に，日本では女性が友だちから恋人になりつつある相手の男性を姓（family name）で呼び捨てにするのがふつうであるかのような印象を与える可能性も気になるところだ。

何といっても，英語の世界であれば，緑は当然知り合ってすぐにトオル（Toru）と呼びかけているはずだ。それをあえて日本語の原文の呼びかけのまま基本的に Watanabe で押し通したのは訳者 Jay Rubin のひとつの見識だとは思う。これらの呼びかけをすべて Toru にしてしまうのは明らかに米国の文化に同化させてしまう方策 ── いわゆる domestication ── で，「ねえ、ワタナベ君」という呼びかけに含まれる日本文化から遠ざかる結果となっただろう[15]。しかし，それでも，"Hey, Watanabe" が日本人には ── 少なくとも私には ── 違和感が残るとすれば，日本語の「敬称」と「呼びかけ」（「兄さん」や「課長」なども）は英語に翻訳できない文化だからに他ならない。それと，「ねえ」も，常に呼びかけているのではないので，Hey よりも You know とか Well で十分な場合もあるような気がする。

15 ドイツ語版では，呼びかけを省いたり，Tōru としている例が多いように思われる。

それに関連して大変興味深いのは，訳者は直子がトオルに呼びかける際，ワタナベを Toru に変えた箇所がある点である。

ワタナベ君、ここに来てくれてありがとう。（上，p.214）
"Toru," she began, "I really thank you for coming to see me. ..."（p.104）

ありがとう。そんな風に言ってくれてすごく嬉しいわ。（下，p.184）
Oh, Toru, thank you.　I'm so happy that you would ask me to do something like that!（p.238）

すぐ上の例は，興味深いことに原文にない呼びかけを付け加えている。訳者は恐らくこれらの箇所は Toru というファースト・ネームがごく自然だと考えたのではないだろうか。というよりも，なんのためらいもなく Toru という呼びかけに移し変えた，あるいは付け加えたのではないかとさえ思われる。直子とトオルが一度だけ性的に

交わったことがあるというだけではなく，トオルの献身的な愛，二人の霊的な交わりの深さを考えると，ここでは英語では Toru と呼びかける以外に考えられないだろう。精神を病んで世間から隔絶された生活をしている直子の心からの感謝の気持ちを表すときに，どう考えても Watanabe はありえないはずだ。

こういう文化的な落差の問題を避けるためには，思い切ってすべて Toru にするか，あるいは省略してしまうこともストラテジーとしてありうるだろう。ただ，Toru にするのは，先にも述べたが，原作の日本の文化を訳者の自国の文化に移し変えることになる。また，省略するのも実は難しいかもしれない。周知のように，英語文化は呼びかけを頻繁に使用する文化で，相手が目の前にいても少しでも沈黙の間があったりすると次のときに名前を呼んで話しかけることがごくふつうにある。また，とくに緑という女性は日本人にしては呼びかけが多いのが大変特徴的なので，それを無視するというのは英語圏の人にとってはもう本能的に無理なところがあるのではないだろうか。

以上，「ねえ、ワタナベ君」と “Hey, Watanabe” の中に日本語から英語への移し変えにともなう微妙なズレを見てきたが，この項を終える前に，もうひとつだけ，ささいな箇所だが，文化が消された例に触れておきたい。トオルと酒を飲み，酔っ払った緑が尿意をもよおして，「高い高い木の上にのぼっててっぺんから蝉みたいにおしっこしてみんなにひっかけてやるの」(下，p.162) というところだが，英訳は次のようになっている。

> Hell, I'm gonna climb all the way to the top of a great, big, tall tree and I'm gonna pee all over everybody. (p.226)

つまり，「蝉みたいに」がカットされてしまった結果，この文の与える印象はずいぶん変わると思う。英文の方は，比喩がなくなったことにより，緑本人が直接木の上からおしっこをするというイメージそのものが前面に出てかなり卑猥な感じになってしまっている。欧米の読者に「蝉」が理解されないからといって，それを消してしまっていいのかどうか。小さな問題といえばそれまでだが，「蝉」ひとつでも文化なのだということを改めて認識した箇所であった。他にもいくつかこういった例はあるが，本稿ではここまでにしておきたい。

結び

さて，以上，『ノルウェイの森』のカッコ付き「文化」の翻訳を検討してきたが，あまりにも当たり前のことをいうと，言葉が文化である限り，結局のところはまったく equivalent (等価) な置き換え・移し変えというものはありえないということが，ほんの小さな擬音語ひとつをとっても再認識できたと思う。

より大きな文化的次元になると，北條文緒氏の『翻訳と異文化 ── 原作との〈ずれ〉が語るもの』(みすず書房，2004) の中に，村上春樹の『羊をめぐる冒険』の英訳 ── こちらは Alfred Birnbaum の訳 ── では，パラグラフの改編や文の省略によって，原作の基調である迷いやためらいよりもテンポ感が，哀感よりも緊迫感が前面に出た翻訳になっていることが分析され，それは基本的に他の日本文学の英訳にも見られる共通するストラテジーであることが指摘されている。とすると，これも当然ながら，英語圏の人々 ── 今は英語圏の読者に限ることはできないだろうが ── は，英語文化の論理によって変容された作品を読んで，それが村上春樹とか吉本ばななの小説だと思う可能性があるということになる。これは確かに大きな文化の誤解を招く翻訳ということになるかもしれない[16]。

しかしながら，そういう大きな問題を別にすれば，「ぽりぽり」は crunch でも，「おにぎり」は rice ball でも，「大田区田園調布」が消えても，「ねえ、ワタナベ君」が “Hey, Watanabe” になっても，*Norwegian Wood* は英語圏の読者を間違いなく感動させることができるのもまた事実である。村上春樹自身，自分の作品の翻訳について，細かな表現レベルのことよりももっと大きな物語レベルのものさえ伝わってくれればいいと語っている[17]。確かに私たち日本人は，明治以来，恐らくは訳者が自分が翻訳している作品中の外国文化・外国の事物についてほとんど知識がないまま翻訳したかもしれない世界文学を読んで感動し深い影響を受けてきたのだから。

本稿では，『ノルウェイの森』というひとつの小説の中のごく小さな言語や事物を中心に，日本文化が英語文化という鏡にどのように映っているかを見てきた。私は，私たちが相手の鏡の中の映像がどんな風にずれたりゆがんだりしているかを理解する手がかりとして，このような個別の日本の小説とその翻訳との比較対照は十分に意

16 この問題に関しては，『A Wld Haruki Chase』における沼野充義氏のような「翻訳される言語の数だけ，翻訳者の数だけ村上文学はある」('シンポジウムを終えて', p. 238) という，それぞれの国の翻訳者によって変容させられる文化を容認する立場もある。一方，英語版からの重訳に関して，ジェイ・ルービン著『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』(新潮社，2006) の「付録」の章で，「英語圏の文化的帝国主義」(p.411) をめぐる議論も紹介されている。

17 村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』(文春新書，2000)，p.84。

味のあることだと考えている。そして，同じことが，村上春樹作品の欧米語訳はいうまでもなく，中国語訳，韓国語訳，タイ語訳，インドネシア語訳等々，英語以外の言語に訳された翻訳との比較対象についてもいえるだろう。さらに，そのようにして明らかにされたそれぞれのずれやゆがみを異なる言語間で比較対照することにより，複数の文化がお互い相手をどのように鏡に映し合っているかを理解するための手がかりのひとつを得られるのではないかとも考えている。